スポーツ環境の理想像の検討

― 生涯教育から生涯学習への転換 ―

A study on the vision of environment in sport

― A shift from lifelong education to lifelong learning ―

体育学部体育学科
髙橋　　徹
TAKAHASHI, Toru
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

キーワード：スポーツ環境，生涯スポーツ，パラダイム転換

Abstract：The purpose of this study is to consider the vision of environment in sport through the concept of lifelong education and lifelong learning. This paper explains a contention in a discussion about a sport environment, and examines a background of the discussion. The study considers an argument for to examine a vision of environment in sport that solves the problem.

The problem inherent in sport environment is a situation what child does not a sport as only lesson. Namely in this situation, the scene of sport for child is kept under a control of adult. There is a turn of paradigm of school education for instruction to learning in background that is pointed out a problem of sport as lesson. This imply the dawn of new perspective for child as learning existence in view of education at society.

The one of argument about a vision of sport environment is a turn of paradigm of sport environment that reacts a turn of paradigm of education. This implies that educate to learn through sport. The realization is required to do a place which can provide opportunities for learning.

要旨：本研究の目的は，スポーツ環境の在り方の理想像を生涯教育と生涯学習の視点から検討することである。本稿ではまず，スポーツ環境の在り方に対して指摘される問題点を明らかし，そうした議論が生じる背景を考察する。そして，それらの問題点を乗り越えたスポーツ環境の在り方を考察する上での論点を検討する。

スポーツ環境が抱える問題とは，子どもがスポーツを習い事としてしか行えないという状況である。それは子どものスポーツ実践の場が大人の管理下に置かれることを意味している。習い事としてのスポーツの問題点が指摘される背景には，教えから学びへという学校教育のパラダイム転換がある。それは，社会全般の教育観の中に子どもは学ぶ存在であるという新たな観点が生まれてきたことを意味するものである。

スポーツ環境の在り方を検討する上での論点には，教育のパラダイム転換に応じたスポーツ環境のパラダイム転換を挙げることができる。それはすなわち，スポーツを通して学びを教えるということであり，その実現には学びの機会を提供できる場が必要になるのである。

Keywords：environment in sport, lifelong sport, paradigm shift

1．問題の所在

現代社会におけるスポーツ・ニーズの高まりを受けて，その活動の場は以前よりも増大しつつある。そうした傾向を後押しする形で，平成23年６月にはスポーツ基本法が制定され，平成24年３月にはスポーツ基本

計画が策定された。この計画の中で提示された基本的な政策課題とは，「年齢や性別，障害等を問わず，広く人々が，関心，適性等に応じてスポーツに参画することができる環境を整備すること」（文部科学省，2012，p.５）であり，そこでは「人々が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境を整える」（文部科学省，2012，p.５）ことが目指されている。

こうしたスポーツ環境の整備を推し進める社会的な傾向は，将来のスポーツ環境の充実に向けた肯定的な動きとして捉えることもできるが，一方で従来のスポーツ環境についての問題点も指摘されている。例えば，新開谷（1999）は，1970年代前半より徐々に子どもの遊び空間への大人の関与が顕著になり，特に1980年代以降，大人の生きがいが労働から余暇の充実へと転換したことで，子どものスポーツ環境も変化したことを指摘している。また，内海（1988）も同様の視点から，「大人文化として確立したスポーツを与えられるだけでは，子どもたちにとっては管理でしかない」（内海，1988，p.32）と述べるとともに，大人が主役となるスポーツ環境からの子どもの解放を訴えている。一方で永井（2013）は，子どもにとってスポーツが一つの習い事へと転化しつつある現状に対し，「子供たちは幼い頃から物事を『習う』という図式の中に浸り切ります」（永井，2013，p.37）と述べるとともに，「今や子供たちの中では，すべからく物事は人から『教わる』ものであるという図式が，幼少期から深く根付いてしまっています」（永井，2013，p.37）と危機感を募らせている。

このように現代社会におけるスポーツ環境，特に子どものスポーツ環境に対する問題提起は，1980年代後半以降，継続的に議論されてきた。それはすなわち，スポーツ環境の整備が進行する最中においても，その環境の在り方が問われてきたということであり，翻せば，現代社会において充実しつつあるスポーツ環境の中にも数多くの問題点や改善点が潜んでいることを意味している。従って，それらの指摘を真摯に受け止めるならば，そこからはスポーツ環境の在り方をより良いものへと改善していく上で検討すべき課題を窺い知ることができるはずである。それはすなわち，スポーツ基本計画で示された「人々が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境」とは如何なる環境であるべきなのかを改めて問うという課題である。

２．研究目的・方法

本研究の目的は，生涯スポーツの理念を実現する上で整備されるべきスポーツ環境の在り方の理想像を理論的に明らかにすることである。

本稿ではまず，スポーツ環境の在り方に関する問題提起の議論を概観した上で，そうした議論が生じる背景を考察する。その上で，指摘される問題点を乗り越えた形での生涯スポーツ環境の在り方を検討することとする。なお，本研究では既存のスポーツ環境の在り方に対する批判的な議論を取り上げることとなるが，それは現状のスポーツ環境批判を目的としたものではなく，現状批判を超えた環境の在り方の理想像を考察するための建設的な議論を目指すものである。

３．スポーツ環境の現在的問題

スポーツ環境が抱える課題についての議論としては次のようなものが挙げられる。まずひとつは，現代社会における子どものスポーツ環境の在り方，それ自体が抱える課題についての議論である。そこで取り上げられる内容は，早期教育・早期指導の弊害，管理主義教育の弊害，子どもスポーツの商業主義化の問題，子どもスポーツの成果主義化の問題，子どもの生活時間に占めるスポーツ活動時間の増大問題等である（山本，1988a，1988b，1993，1999；高橋，1999；内海，1988）。次に，スポーツ関係組織の運営方針，指導プログラムの内容や指導場面の人間関係についての議論がある。そこで取り上げられる内容は，勝利至上主義の指導方針，親や指導者による過干渉，スパルタ型の指導・教育方法の蔓延等である（永井，2006；加賀山，1996；山本，2007；岡本，1995）。これらの議論に共通する視点は，子どもを教育し成長させる場として，現在のスポーツ環境は数多くの問題を抱えているという問題提起である。そしてその中心には，子どものスポーツ実践の場が大人の管理下に置かれており，現在の子どものスポーツ環境が，総じて習い事としての環境になっているという現状への問題意識がある。このような状況を金子（2007），新開谷（1999），仙田（1992）はそれぞれ次のように表現している。

> 競技人口を増やすことで，自ずからトップ選手が生まれてくるといった従来の方式ではなく，トップ選手は「つくられていく」時代になりつつあるのかもしれない。一方で，トップ選手を目指す層で

なくとも運動は「習う」時代なのだ（金子，2007，p.14）。

子どもは塾や習い事やスポーツ少年団，スイミングスクールといった大人が管理する組織に吸収されていった。ここでの大人と子どもは「教える－教えられる」「指示する－指示される」関係にある（新開谷，1999，p.24）。

いま，野球はクラブに入ってやるものと思われている。サッカー，水泳などもクラブに入らなければ，と親も子も考えている。…中略…今のスポーツはどれもおけいこごとなのだ（仙田，1992，p.37）。

このように，スポーツ環境が抱える課題には，子どものスポーツ実践の場が大人の管理下に置かれることで，子どもがスポーツを習い事としてしか行えないという状況が生じていることが挙げられる。このスポーツ環境の抱える課題を解決するためには，習い事としてのスポーツが批判を受ける背景を探り，現状批判を超えた環境の在り方の理想像を明らかにすることが必要になろう。

４．教育のパラダイム転換

スポーツ環境の問題点を指摘する議論に共通の視点は，子どもの教育の場として，従来の環境が適しているのか否かを問うというものであった。そのようにスポーツ環境に対して教育の視点からの議論が生じる背景には，教育に対する認識の変化が窺える。教育に対する認識の変化の中でも特に，学校教育観の変化は「学校教育のパラダイム転換」（高橋，1992，p.160）と呼ばれており，教育学の研究領域ではその必要性が訴えられてきた。特に，教育哲学者の高橋（1997）と教育学者の佐藤（2009）はそれぞれ，「近代型教育の終焉」（高橋，1997，p.３），および「東アジア型教育の破綻」（佐藤，2009，p.276）という言葉を用いることで，既存の学校教育の枠組みを否定し，そこから新たな学校教育の枠組みへの移行というパラダイムの転換を提唱する。

高橋（1997）は既存の学校教育の特徴として，「教師が教え，生徒たちが一斉に学ぶ場」（高橋，1997，p.５）が学校であるという先入観の再生産，子どもを「教育されるヒト」（高橋，1997，p.６）として認識すること，「主体的に学習させる」（高橋，1997，p.７）という発想が論理矛盾を抱えていること，自主性や主体性を育てなければならないものとして見なしていること，教える立場と教えられる立場という教えと学びの二項対立図式，子どもの「教育的管理」（高橋，1997，p.10）の発想の上に教育の枠組みが成り立っていること等を挙げている。一方で，佐藤（2009）は既存の学校教育の問題点として，「圧縮された近代化」（佐藤，2009，p.275），社会移動の流動性によって生じた過激な受験戦争，大量の知識を画一的効率的に伝達し，個人間の競争を組織して所定の教育内容を確実に習得させる教育の推進，産業主義との親和性等を挙げている。

これらの議論は学校教育を対象としたものではあるが，その本質の部分ではスポーツ環境の問題点を指摘する議論との関係性が窺える。例えば，高橋（1997）が指摘する「教育されるヒト」としての子ども観は，スポーツの指導場面における親や指導者による過干渉，スパルタ型の指導・教育方法，管理主義教育等の問題と繋がるものであり，「教育的管理」の発想の上に立つ教育などは，正にスポーツにおける管理主義教育と関係している。また，佐藤（2009）の指摘する画一的効率的な知識伝達による教育の推進は，子どもスポーツの成果主義化の問題と繋がっており，産業主義との親和性は，スポーツの商業主義化や勝利至上主義に偏った指導方針の蔓延等の問題と繋がるものである。このように考えるとき，学校教育のパラダイム転換という考え方は，今や学校教育を超えて社会全般の教育観としても認識される視点となっており，それが子どもを教育する場としてのスポーツ環境の捉え方をも大きく変えつつあると考えることができるのである。従って，既存のスポーツ環境の在り方が問題視され，習い事としてのスポーツが批判を受けるようになった背景には，ここ20年程の間に議論されている学校教育のパラダイム転換を含む，社会全般の教育観の変化が存在していると言えよう。

なお，それは翻せば，学校教育のパラダイム転換の視点から指摘される既存の学校教育の問題点は，既存のスポーツ環境の抱える問題点として置き換えることも可能であり，パラダイム転換の議論を通して示される新たなパラダイムとしての教育観は，スポーツ環境の在り方を考える上での新たなパラダイムにもなり得ることを意味している。学校教育のパラダイム転換の視点から指摘される学校教育の問題点をスポーツ環境の問題点として置き換えてみると，それは次のようにまとめることができる。

1）スポーツとは指導者が教え，子ども達が一斉に活動するものであるという先入観の存在
2）子どもを「教育されるヒト」として捉える
3）主体性をもったプレーを“させる”という発想の論理矛盾を抱えている
4）スポーツ教育場面における「教える立場」と「教えられる立場」という二項対立図式の成立
5）「教育的管理」の発想から子どもを捉えたスポーツ環境の存在
6）技能を画一的効率的に伝達し，所定の技能を習得させる教育方法の推進

学校教育のパラダイム転換の議論を通して，高橋（1997）は，「現在，私たちは，伝達・受容型の学びではない，また功利的原理にもとらわれない，人間にとっての＜学び＞の根源的な意味を探索する必要性に迫られている」（高橋，1997，p.14）と述べるとともに，新たなパラダイムとして次のような視点を示している。それはすなわち，「学び」を吸収するものではなく，既に蓄積されている何かがある刺激を通して表出されていくこととして捉えること，子どもを教育されるヒトとしてではなく「学ぶヒト」（高橋，1997，p.19）として捉えること，「受験や就職の準備という功利的な＜学び＞を越えて，それ自体が喜びであるコンサマトリー（自己充足的）な＜学び＞」（高橋，1997，p.21）を十分に味わい尽くすこと，学校の理想は自ら「学ぶヒト」たちが自然に寄り集まり，共に学び，共に教え合う場所であるべきという考え方等である。

また，佐藤（2009）は「競争の教育から共生の教育への転換」（佐藤，2009，p.287），「学びの共同体としての学校づくり」（佐藤，2009，p.288），「勉強から学びへ」（佐藤，2009，p.288）の転換，「協同的な学びの実現」（佐藤，2009，p.289）を提案している。競争の教育から共生の教育への転換とは，「平等（equality）の教育と質（quality）の教育の双方を同時に追求すること」（佐藤，2009，p.287）を意味しており，学びの共同体としての学校とは，子どもたちが学び育ち合うだけでなく，教師たちが教育の専門家として学び合う学校，そして親や市民が教育活動に参加して学び育ち合う学校を意味している。勉強から学びへの転換では，知識と学びの量よりも質，結果よりも過程，効率性よりも発展性を重視することが目指されており，協同的な学びで目指されるものは，授業における教師の仕事を「伝達すること（話すこと）」ではなく，教師の教えるという活動の中心を「聴くこと」や「つなぐこと」として捉えるということである。

5．スポーツ環境のパラダイム転換

高橋（1997）と佐藤（2009）が提案する新たな学校教育のパラダイムを総括すれば，次のような視点から学校教育の在り方を考える必要性が見えてくる。

1）「学び」の視点を取り入れた「教育」概念
2）何かの目的のために学ぶのではなく，学ぶことの過程を重視した自己充足的な学びの実現
3）子どもを教育されるヒトではなく学ぶヒトとして捉える
4）「教える立場」と「教えられる立場」という二項対立型の教育的管理の発想の解体
5）「教育」ではなく「共育」の概念（教師も子どもも共に学び合い育ち合うという形の教育の実現）

これらの視点は，学校教育に限らず，スポーツ環境の在り方に対しても多くの示唆を与えるものである。スポーツ環境に対する問題提起が生じる背景に学校教育のパラダイム転換の議論が存在すると仮定するならば，そこで示される既存の教育パラダイムの問題点にはスポーツ環境の抱える問題点との繋がりを見出すことができる。従って，教育のパラダイム転換の議論を通して提示される新たな教育パラダイムは，スポーツ環境の在り方を考える上での一つの指針にもなり得るものである。

高橋（1997）と佐藤（2009）による学校教育のパラダイム転換の議論を通して提示された新たな教育のパラダイムに共通する認識は，学びの視点の導入に集約することができる。そしてこれこそが，スポーツ環境を教育環境として捉えた場合に目指されるべき環境の在り方を考察する上での指針にもなる。なぜなら，スポーツ環境の問題点を指摘する議論に共通する考え方もまた，子どもが習うという認識を打破しつつ，子どもは学ぶ存在であるという認識を持つべきという主張だからである。従って，新たな教育パラダイムの考えに依拠するならば，スポーツ環境の在り方を新たなパラダイムに応じる形へと転換するという，言わばスポーツ環境のパラダイム転換が必要になるのである。それはすなわち，教えから学びへという考え方の転換を意味している。

しかし，これは教えるという側面を否定するという単純な話ではない。なぜなら，永井（2013）も指摘するように，現代の子どもたちは年端もいかない頃から物事を習う環境に置かれてしまい，須らくスポーツは人から教わるものであるという図式が子どもたちの間に深く根付いてしまっているためである。すなわち，永井（2013）の指摘に倣うならば，現代の子どもの多くはスポーツの経験を通して自ら学んだという経験が無いために，そこからは学ぶという方法が習得できていないと考えることができるのである。またそれは，スポーツを通して自ら学ぶ力を育てるという視点が従来のスポーツ環境の考え方からは欠落していることを意味するものである。この状況を自省的に捉えるならば，スポーツ環境のパラダイム転換とは，教えることの側面の単なる否定ではなく，教えることを越えて学ぶことへと繋がっていく教育，すなわちスポーツを通して学ぶことを教えるという視点への転換であると考えることが妥当であろう。それはすなわち，教えることに重点を置く既存のスポーツ環境の在り方の重要性と必要性を認めつつ，そこに学びを教えるという視点を取り入れることで，スポーツ環境の考え方のベクトルをより広範に向けることを意味している。

なお，体育学の研究領域において学びを教えるという視点は特に真新しいものではなく，1990年代後半にその議論が展開されて以降，継続的に議論の俎上に載せられてきた命題である。特に，その命題が登場した当初，議論の多くは1990年代初めに登場した「新しい学力観」の文脈において展開され，そこでは学校教育において自ら学ぶ力を育てるための授業やカリキュラム作りが目指されていた（岡出，1996；岩田，1996；細江，1996；松田，1996）。また最近でも，教育学の研究動向に応じる形で，体育における学びの探求が試みられたこともある（鯨岡，2011；岡野，2011；松田，2011）。

しかし今や，学びを教えることで自ら学ぶ力を育てるという課題は，学校教育にだけ求められる使命ではない。スポーツ環境が抱える問題点への指摘を概観してみても，それは学校で行われる体育の授業やクラブ活動，部活動に限った指摘ではなく，全ての世代の人々がスポーツを実践する環境を対象とした議論となっている。そこにはもはや，学校という枠組みを超えて，広くスポーツ環境に対する認識の変革が求められていると言っても過言ではないのである。そうした要求に応えるためにも，学校教育に限定されない形での，スポーツ環境における教えから学びへの考え方の転換を検討することが必要になるのである。

なお，この課題を考えるにあたり，現代社会が生涯スポーツの理念の実現を目指す社会として，生涯スポーツという言葉が全世代のスポーツに通ずる共通概念であることを鑑みる必要があろう。そこでは，スポーツ環境のパラダイム転換について，生涯スポーツの概念を通した検討が求められるのである。

６．生涯スポーツ環境の在り方

生涯スポーツとは二通りの解釈ができる言葉である。それはすなわち，「生涯教育（lifelong education）」の考え方に基づく生涯スポーツ，および「生涯学習（lifelong learning）」の考え方に基づく生涯スポーツという解釈である。生涯教育とは，「生涯を通じて教育の機会を保障すべきであるとする教育観に基づいて行われる成人教育」（広辞苑第五版，1998，p.1303）であり，一方で生涯学習とは「自己の充実・啓発や生活の向上のために生涯を通じて主体的に学習すること」（広辞苑第五版，1998，p.1303）と定義される。従って，生涯教育に基づく生涯スポーツとは，生涯を通じてスポーツを教える，あるいは教えられるという機会を保障することを意味しており，それは子どもに限らず，全ての世代がスポーツを教わることのできる機会を提供することを意味しているのである。一方で生涯学習に基づく生涯スポーツとは，生涯を通じて主体的にスポーツを行う機会を保障することを意味しており，それはスポーツを誰かから教えられるのではなく，自らの手でスポーツを学ぶ機会を作り出すことを意味しているのである。このように，同じ生涯スポーツという言葉であっても，その基盤が生涯教育にあるのか生涯学習にあるのかによって目指すべき姿は変わってくるのである。

しかし，先述したスポーツを通して学びを教えるという視点への転換を考えてみた場合，この２つの生涯スポーツの考え方のいずれの側面も必要であることが分かる。それはすなわち，生涯を通じてスポーツを教えられること，つまりスポーツを習うという教育の機会を保障することと併せて，生涯を通じて自ら主体的にスポーツを通した学びを実践することの機会を保障するという，教育の機会と学習の機会の双方を保障する必要があるということである。従って，スポーツ教育のパラダイム転換の視点から生涯スポーツ社会の実現を考えるならば，人々がスポーツを習う機会を増やすだけでなく，スポーツを習った先にあるスポーツを

通した主体的な学びの機会を如何にして増やすかがそこでは問われてくるのである。

「生涯学習」とは，よく誤解されているように，社会の変化に乗り遅れないために，生涯にわたって「勉強」し続けるという意味ではない。そうではなくて，それは，ライフ・サイクルの各時期を，社会的役割を遂行しつつも，同時に，それから距離をおいても生きてゆくことのできる自律的な＜学び＞を続けることである。それは，…中略…自己充実感のある人生を送る基礎を養うことなのである（高橋，1997，p.23）。

この指摘に見られるように，スポーツを習い事として生涯続けられる社会を生涯スポーツ社会の将来像として構想してはならないのである。習い事としてのスポーツを離れても，スポーツを通して自律的な学びを続けることで，自己充実感のある人生を送る基礎を養うことこそが生涯スポーツの目指すべき姿であり，それを下支えすることこそがスポーツ環境の最終的な理想像であるべきなのである。その目標を達成するためにも，教えを越えて学びへと繋がっていくスポーツ教育，すなわちスポーツを通して学びを教えるという視点が必要になるのである。

しかし，学びを教えるという発想には懸念すべき課題も潜んでいる。高橋（1997）は，自主性や主体性を育てようとする教師の在り方に疑問を投げかけつつ，それを次のように指摘している。

子どもたちを「主体的に学習させる」という発想自体が，すでに論理矛盾であることに気づく教師は，意外に少ない。外部から「学習させた」ものは，すでに「主体的なもの」とは言いがたいはずだからである（高橋，1997，p.7）。

この指摘に依拠するならば，学びを教えるという発想には論理矛盾を孕む危険性が付随しているということになる。学ぶことすなわち学習するということは，本来，主体的なものであるため，外部から第三者が押し付けることは困難なはずであり，かつ第三者が学習させた場合に，それはあくまでも“させた”ものとして，既に主体的なものではなくなってしまう危険性を孕んでいるのである。このように考えるとき，スポーツを取り巻く環境を整えるだけでは，このパラダイム転換の問題は解決が困難であることが分かる。なぜなら，スポーツに関わる組織の運営方針，指導・活動内容，指導者の考え方等を転換したとしても，それはあくまでも主体としてスポーツを行う人間から見れば，全てが外部の第三者としての存在からの働きかけに過ぎないものとなってしまうからである。従って，学びを教えるという発想を実現するためには，スポーツ環境の在り方を転換することと併せて，自律的な学びを実践できる場を準備することが必要になる。それはすなわち，子どもが学べる，もしくは学ぶことのできる場としての物理的な環境を整備するということを意味しているのである。

7．結論・展望

本研究の目的は，生涯スポーツの理念を実現する上で整備されるべきスポーツ環境の在り方の理想像を理論的に明らかにすることであった。本稿ではまず，スポーツ環境の在り方に関する問題提起の議論を概観した上で，そうした議論が生じる背景を考察した。その上で，指摘される問題点を乗り越えた形での生涯スポーツ環境の在り方を検討した。

スポーツ環境の抱える問題点を概観すると，子どものスポーツ実践の場が大人の管理下に置かれてしまうことで，子どもがスポーツを習い事としてしか行えないという状況が生じていることが問題視されていることが明らかとなった。その背景には，教えから学びへという学校教育のパラダイム転換の影響により，社会全般の教育観の中に，子どもは学ぶ存在であるという新たな観点が生まれてきたことを挙げることができる。それはすなわち，スポーツが教育との関わりを抜きにしては成立し難い現代社会において，既存のスポーツ環境に根付いている指導者が教え，子どもは教わる・習う存在であるという認識からの転換が求められることを意味するものである。

スポーツ環境の在り方を検討する上での論点としては，教育のパラダイム転換に応じたスポーツ環境のパラダイム転換を挙げることができる。しかし，それは教えることを否定した学びへの転換ではなく，教えることの必要性を認識しつつ，教えることを越えて学びへと繋がっていく教育，すなわちスポーツを通して学びを教えるという考え方への転換を意味している。そして学びを教えることを実現するためには，単にスポーツ環境の在り方に対する認識を転換するだけでなく，学びの機会を提供できる場としての物理的な環境の整備が求められるのである。

本稿での議論は，教育環境としてのスポーツ環境を考える上での一つの問題提起に過ぎない。従って，今後の課題としては，ここで示された論点と議論の方向性について更なる検証を行い，現実的問題を解決に導く方法の解明へと繋げていくことが求められよう。そしてそれが，スポーツ環境に対して提起される問題を乗り越えた形での，生涯スポーツの理念の実現に向けたスポーツ環境を構想することへと繋がっていくのである。

引用文献

細江文利（1996）自ら学ぶ力を育てるカリキュラムの在り方．体育科教育，44（２）：31-34.

岩田靖（1996）自ら学ぶ力を育てる授業づくりの視点．体育科教育，44（２）：28-30.

加賀山耕一（1996）スポーツに管理される子どもたち．体育科教育，44（１）：34-37.

金子昌世（2007）なぜいま「キッズスポーツ」ブームなのか．体育科教育，55（10）：14-17.

鯨岡峻（2011）「学び」とは何か－関係論的学び論．体育科教育，59（６）：10-13.

松田恵示（1996）自ら学ぶ力を育てる学習形態．体育科教育，44（２）：34-37.

松田恵示（2011）新しい体育の「学び」のパラダイム．体育科教育，59（６）：18-22.

文部科学省（2012）スポーツ基本計画.

永井洋一（2006）スポーツに英才教育は必要なのか．体育科教育，54（１）：34-37.

永井洋一（2013）少年スポーツ ダメな大人が子供をつぶす！．朝日新聞出版：東京.

岡出美則（1996）自ら学ぶ力をつける教師の教育力．体育科教育，44（２）：25-27.

岡本博志（1995）日米比較・子どもスポーツ事情．体育科教育，43（２）：29-32.

岡野昇（2011）体育における「学び」の探求の移り変わり．体育科教育，59（６）：14-17.

佐藤学（2009）教育の公共性と自律性の再構築へ－グローバル化時代の日本の学校改革．矢野智司ほか編「変貌する教育学」．世織書房：神奈川，pp.271-291.

仙田満（1992）子どもとあそび．岩波書店：東京.

新開谷央（1999）スポーツをめぐる子どもと大人の関係論．体育科教育，47（８）：23-25.

新村出編（1998）広辞苑第五版．岩波書店：東京.

高橋勝（1992）子どもの自己形成空間．川島書店：東京.

高橋勝（1997）学校のパラダイム転換．川島書店：東京.

高橋豪仁（1999）子どもの生活構造の変化とスポーツ．体育科教育，47（８）：32-34.

内海和雄（1988）子どもスポーツの大人からの解放を．体育科教育，36（１）：32-34.

山本清洋（1988a）子どもの遊び・スポーツの今日的課題．体育科教育，36（１）：25-27.

山本清洋（1988b）様変わりする子どもスポーツ．体育科教育，36（12）：43-45.

山本清洋（1993）様変わりする子どものスポーツ．体育科教育，41（11）：22-24.

山本清洋（1999）子どもとスポーツ，今何が問題か．体育科教育，47（８）：10-12.

山本清洋（2007）幼少年期の遊び・スポーツの現在．体育科教育，55（10）：10-13.